
発展学習03-5

人生観(ライフスタイル)と随伴性

いっばんに、個々人の人生観やライフスタイルは、思想、信条、宗教によって決まってくると思われています。確かに、強固な信仰や信念のある人の場合は、

- ・日々、自らの行動が信念に一致するものであるかを点検する。
- ・「信念に一致する」という事実そのものが好子となる。
- ・「信念に矛盾する」という事実は嫌子となる。

という形で、自らの行動を律していることでしょう。特に、宗教上の理由でお酒を飲まない、肉を食べない、日々お祈りをする、といった行動をしている人の場合には、戒律を守る行動が強化され、守らない行動は弱化されるようなシステムが、同一宗教のコミュニティの中でできあがっていると考えられます。

もっとも、僧侶や聖職者といった特別の立場の人たちを除けば、私たちは、そこまで厳格な戒律に縛られているわけではありません。思想や信条や宗教を尋ねられた時にはそれなりの立派なお考えが表明されるかもしれませんが、日常生活では結構いい加減で、その場の雰囲気に合わせて敬虔な信者になったり無思想になったりしています。

思想や信条というのはまた、個々人の経験の中でも変化していきます。思想・信条と実際の行動が矛盾した場合、その行動を中止するか、思想・信条のほうを修正してその行動を合理化するのはケースバイケースとなりますが、長い目で見れば、後者のほうが圧倒的に多いのではないのでしょうか。なぜなら、思想・信条には絶対的に正しいことを示すような証拠はありません。通常、それが正しいかどうかは、日常体験の中で実証または反証されていきます。よほどの固定観念にとらわれない限り、その人がどのような思想・信条を持っているのかということは、それがどのように強化・弱化されてきたかに依存します。なお、宗教も1つの思想ではありますが、宗教の場合には教義や戒律があります。圧倒的多数が同じ宗派に属しているような地域では、その宗派の戒律に従う行動は強化され、反応する行動は制裁により弱化されますので、そう簡単に改宗するわけにはいきません。

以上、思想や信条や宗教について取り上げてきましたが、結局のところ、強い信念に基づいて行動する人たちというのは、「このような場では、このように行動するべきだ」という「ルール」が確立しており、かつ、その「ルール」に合致しているかどうかを点検する行動自体が強化されているような人たちのことであると言ってよいでしょう。なお、ルール支配行動については、本文第7章をご覧ください。

さて、強固な思想信条を持たない人たちでも、それなりのライフスタイルがあります。それらは、大部分、習得性好子や嫌子の質、結果の及ぶ範囲（＝「関与空間」）、結果の遅延の長さ（究極的結果に至るまでの年数）によって変わってきます。

・習得性好子や習得性嫌子の有効性や質的な違い

生得性好子や生得性嫌子は自然環境に密着しており、よりリアルなライフスタイルとなる反面、快楽に依存した刹那的な生き方になりやすい恐れもあります。習得性好子は新たな価値の創造につながりますが、個人により多様に形成されるため、時にはマニアック、あるいはバーチャルな世界に埋没する恐れもあります。

生得性好子重視傾向：リアルな生活／万人共通／飽和化が起こりやすい／快楽主義的になりやすい

習得性好子重視傾向：バーチャル、時として反生物的／多様、マニアック、時として変人／飽きにくい／努力の積み重ね可能

このほか、「外向性」や「勤勉性」、「協調性」なども、大部分は、社会的な習得性好子がどの程度個人人の行動を強化しているのかに依存していると考えられます。例えば外向的な人というのは、他者との交流という習得性好子によって強化されている人のことです。（内向的な人の場合は、他者との交流は習得性嫌子となり人付き合いが弱化されます。）

・結果の及ぶ広さ（＝関与空間）

ひとくちに「好子出現の随伴性による強化」といっても、その好子が、個人にとっての好子なのか、家族にとっての好子なのか、あるいは地域や所属集団、さらには、母国、人類全体、... にとっての好子なのかによって、ライフスタイルは変わってきます。

好子や嫌子の及ぶ広さが個人のみ限定される人は、一般に「利己主義」、「自己中心的」などと呼ばれます。また、それが、自分の家族全体に及ぶ場合（例えば、獲得した好子を配偶者や子どもと共有することが強化的となる場合や、家族の誰かに危害を与える恐れのある嫌子を消失させる行動をとる場合）は「マイホーム主義」などと呼ばれます。さらに、母国全体に及ぶ場合は「愛国主義」、人類全体に及ぶ場合は「ヒューマニスト」や「博愛主義」となります。

ゴミ収集場所に指定曜日以外にゴミを出す人や、歩道や車道に平気で吸い殻をポイ捨てする人たちも、自分の家の中まで汚しているわけではありません。むしろ綺麗好きであるために、汚いモノを自分の関与空間の外に排除しようとして【嫌子消失】、公共の場を汚しているのかもしれない。よって、これらの人たちの問題行動を改善するためには、関与空間を自室空間から公共空間まで広げるような働きかけが必要です。

・結果の遅延の長さ

自分の行動が直後の結果によって強化されやすいのか、中期的（10年程度）、長期的（一生）あるいは死後に残される結果によって強化されやすいのか、によっても、人生観やライフスタイルは大きく変わってきます。直後の結果だけで強化されている人は刹那的で快楽主義的となります。すでに述べたように、はるか彼方にあるよ

うな好子で行動が強化されるためには、それを達成するための個々の準備行動に対して別の好子を付加してサポートし、かつ、達成の度合いを日々点検していく必要があります。なお、本来、強化や弱化は行動の直後の結果（＝強化と結果の近接的關係）よってもたらされるというのが三項随伴性の原理であり、数年や数十年ののちの究極的結果によって強化や弱化が起こる可能性については、直接効果的随伴性以外の原理（例えばルール支配行動）で説明される必要があります。これについては第7章で説明します。

結果の及ぶ広さ（縦軸）と遅延の長さ（横軸）という2軸に影響されるライフスタイルは、おおむね以下のような表にまとめることができます。

表A03-05-1 縦軸は結果の及ぶ広さ、横軸は結果が随伴するまでの遅延の長さを示す

		究極的結果が生じるまでの遅延			
		直後	数年後	数十年後 (生涯)	死後
究極的結果が及ぶ広さ（関与空間）	自分自身	個人的趣味／刹那的快樂／いま、ここを楽しむ	受験勉強／資格取得／金メダルをみざす	終身雇用型職業／個人的なライフワーク	（宗教者にとっての）天国
	家族	家族団欒／家族の共同作業	子どもの教育支援／マイホーム	三世代以上にわたる扶養／互助	子孫に遺産
	集団（会社、組織、地域、国など）	職場での労働／地域活動／国家への貢献	中期的な社会貢献／チームプロジェクトでの貢献	長期的な社会貢献	自分の死後も多くの人に役立つような功績
	世界全体（人類、地球環境）	直接効果的な支援活動（医療や被災者支援）	継続的な平和活動／新興国支援	長期的視点に立った地球環境保護活動	自分の死後にも役立つような地球環境保護

最後に、以上述べた枠組みから高齢者のライフスタイルを考えてみましょう。高齢者の場合は余命に限りがあることから、数十年後の結果は想定されにくくなります。それゆえ、

- ・直後の結果で強化される活動（「いま、この瞬間を楽しむ」）
- ・自分の死によっても好子消失が起こらないように、子孫や社会に遺るような好子出現で強化されるように活動
- ・天国や輪廻を信じる人の場合は、死後の結果を想定して、教義に合致するように活動す

る

といったパターンが生じやすくなるものと思われます。自分の資産を殖やすことしか頭に
なかつた大金持ちは、晩年に熱心に慈善活動に取り組むようになるかもしれません。しか
し、その場合、『クリスマスキャロル』のスクルージのような恐怖体験は必ずしも必要で
はありません。単に、自分の死による好子消失を避けるために、結果が及ぶ広さを自分自
身から世間一般に広げただけかもしれません。